

【資 料】

## 合同ゼミ発表会による学習効果について

笹 川 篤 史  
大 倉 真 人

### Abstract

How to improve students' presentation skills is an important issue in Japanese universities. However, many students do not have good opportunities to conduct their presentations in front of many audiences. In order to help studying their presentation skills, some seminar classes in Faculty of Economics Nagasaki University gathered and jointly held presentations. This report indicates and analyzes the learning effect of these presentations in joint seminar classes.

Keywords: Presentation, Joint seminar

### 1. 序

本資料は、2013年度の前期および後期において長崎大学経済学部において実施された「合同ゼミ発表会」(複数のゼミが合同で行う発表会)の実施内容やその学習効果についてまとめたものである。

近年、プレゼンテーション能力の向上や研究意欲の喚起等を目的に、インゼミ、ゼミ大会などの合同ゼミは数多く開催されており、その開催数に比例して参加学生数も増加傾向にあると思われる。しかしながら、このような合同ゼミがどのように行われているのか、あるいはどのような学習効果が得られたのか、などの分析や報告についてはさほど多く見られないのが現状である。例えば、国立情報学研究所 CiNii (NII 論文情報ナビゲータ)を用いた抽出を行ったところ、「合同ゼミ発表会」では0件(2014年2月7日現在、以

下同じ)であった。「合同ゼミ発表」では14件が抽出されたが、うち12件は音楽学に関するものであり<sup>1</sup>、1件はテレビ会議を利用した国際大学間の遠隔教育に関するものであり<sup>2</sup>、残りの1件は3年・4年生の合同ゼミに関するもの(異なる学年が同じ時間・場所でゼミを行ったことに関する記述)であり<sup>3</sup>、合同ゼミ発表会に関するものは見当たらなかった。さらに、「合同ゼミ」で抽出したところ、59件が抽出されたが、複数の大学・教員からなるグループを作りプレゼンコンペティションを行うもの<sup>4</sup>、複数のゼミが一緒になり新たなレクリエーションスポーツを開発し体験することを目的とするもの<sup>5</sup>など、各ゼ

1 例えば、大崎(1999)など。

2 佐賀(1993)

3 浅沼(1980)

4 籠谷(2013)

5 増田・島崎(2012)

ミ（グループ）がゼミ活動の一環として準備してきたものを発表するスタイルのものは抽出されなかった<sup>6</sup>。

以上より、合同ゼミ発表会の実施内容にかかる報告やその学習効果について分析については皆無であると考えられる。そして本資料では、このような背景を基礎に、筆者らが所属する長崎大学経済学部において2013年度に実施した合同ゼミ発表会の活動報告を行うとともに、これにかかる検討を加えることとした<sup>7</sup>。

本資料の構成については、以下のとおりである。2においては、合同発表会の活動報告を行う。3においては、当該発表会の成果についてアンケート分析を中心に検討を行う。4は結論部であり、今後の課題等についての私見を述べる。

## 2. 合同ゼミ発表会の活動報告

本章では、2013年度において、長崎大学経済学部で実際に行われた合同ゼミ発表会の活動にかかる報告を行っていく。なお2013年度における合同ゼミ発表会は、前期および後期に実施されたことから、それぞれについて個別に見ていくことにする。

### 2.1 前期における合同ゼミ発表会<sup>8</sup>

前期における合同ゼミ発表会（以下、「前期発表会」と呼ぶ）は2013年6月13日（木）および6月17日（月）に実施された<sup>9</sup>。この

発表会は、プロジェクト性を持たせることを目的に、「政府が募集する『税制・財政上の課題と対応策』に関する、国民、特に若者向けの説明資料の企画コンテストに応募する」という架空の設定の下での企画コンテストの形態を採用した。具体的には、本稿の著者（笹川）が、本テーマに関連するゼミを担当予定の学内教員にメーリングリストを用いてアナウンスした上で、発表ゼミを募集した<sup>10</sup>。その結果、以下の（表1）に掲げるような14本の発表がエントリーされた（4名の教員が担当するゼミがエントリー）。またこの他にも、公共経済学ゼミ（専門ゼミ）、財務会計論ゼミ（専門ゼミ）、マクロ経済学ゼミ（専門ゼミ、教養ゼミナール）、アジア経済論ゼミ（専門ゼミ）、経営学ゼミ（専門ゼミ）からの聴講参加があり、参加者及び見学者数は2日間あわせてのべ135人ほどとなった。なお表の右端列における「ゼミの種類」についてであるが、長崎大学経済学部では、全ての学年においてゼミが配当されており、各学年のゼミごとにその目的や役割が異なっている。本発表会では、1年生から3年生のゼミが参加したが、それぞれのゼミについて簡単に説明すれば、以下のようになる。

- 専門ゼミ：3年生を対象としたゼミであり、4年生時に執筆する卒業論文のテーマ選択等を目的としたゼミとして位置づけられている（長崎大学経済学部では卒業論文の執筆が卒業の必須要件とな

---

あったが、発表本数が予想を上回ったことおよび各学年の時間割等の関連から、専門ゼミおよび教養ゼミナールからの報告（計9本）については6月13日（木）に、基礎ゼミからの報告（計5本）については6月17日（月）に発表を行った。

10 このアナウンスをした時期が学期末（2012年度末）である2月末であったことから、翌学期（2013年度）にゼミ担当を予定していた教員に対してアナウンスを行った。

6 例外として、Okura and Yanase (2013)を参照。

7 ただし、本資料の見解や意見は、筆者ら個人の見解であることを示すものであり、学部等の意見を代表するものでもなければ、今後の方針を確定するものでもない。

8 本節の内容に関しては、笹川(2013)もあわせて参照のこと。

9 企画当初は全てのゼミの発表を1日で行う予定で

表 1：前期発表会における参加ゼミ・報告タイトル・人数・ゼミの種類一覧

ゼミ名（専門領域名）	報告タイトル	人数	ゼミの種類
経済政策ゼミ	消費税について	4人	専門ゼミ
経済政策ゼミ	日本の財政健全化に向けて	4人	専門ゼミ
経済政策ゼミ	お金持ちから吸い取れ!!	3人	専門ゼミ
財政学ゼミ	婚活事業を公的機関がやるべきか	4人	専門ゼミ
財政学ゼミ	長崎は自立できるのか？	4人	専門ゼミ
財政学ゼミ	税金のイメージを変えるために	5人	教養ゼミナール
財政学ゼミ	将来世代の負担軽減のために ～新選挙制度の構築～	5人	教養ゼミナール
租税法ゼミ	財政の現状と赤字改善に向けて	9人	専門ゼミ
保険論ゼミ	各国の年金制度と問題点 ～日本・中国・スウェーデン～	11人	教養ゼミナール
財政学ゼミ	子供を作りやすい環境は実現可能か	5人	基礎ゼミ
財政学ゼミ	少子高齢化が生んだ問題を改善する移民政策	5人	基礎ゼミ
財政学ゼミ	出産育児のしやすい環境をつくるために	5人	基礎ゼミ
租税法ゼミ	財政と社会保障制度について	15人	基礎ゼミ
租税法ゼミ	財政赤字	15人	基礎ゼミ

っている)。8名から12名を定員とし、  
通年必修科目。

- 基礎ゼミ：2年生を対象としたゼミであり、専門ゼミへの橋渡しとして位置づけられている。15名を定員とし、前期選択科目。
- 教養ゼミナール：1年生を対象としたゼミであり、大学での学習の入口として位置づけられている。10名程度を定員とし、前期必修科目。

なお1報告の発表時間は10分から15分とし、発表の後に質疑応答の時間を設定した。そして質疑応答の後、発表者を除く参加者全員によってクリッカーによる投票を実施した。具体的には各参加者に事前にクリッカーを配布し、そのクリッカーによって、各プレゼンテーションについての投票による評価を実施した。「発表の分かりやすさ」をテーマに1点から9点の得点を付けてもらい（9点

が最高、1点が最低）、その分布および平均点をプレゼンテーションが終わるごとに示すという方法が採用された。また各プレゼンテーションに対する定性的なコメントを求めるべく、参加者に「評価シート」を配布した上で、「分かりやすかった点、参考になる点、自分たちの発表よりも優れていた点」および「分かりにくかった点、自分たちの発表の方が優れていると思う点」を記載してもらった。

また6月13日（木）および17日（月）の発表会の終了後、合同ゼミ発表会のさらなる改善等を目的にアンケート調査を行った。このアンケート調査は、今回のゼミ発表を行った「参加ゼミ」と聴講の形で参加した「見学ゼミ」に区分して行われた（ただし「見学ゼミ」についてのアンケートは6月13日（木）のみ実施）。なお、各アンケート調査における質問項目については、以下の（表2）および（表3）のとおりである。いずれも5段階評

表2：前期発表会におけるアンケート調査項目（参加ゼミ）

質問1	財政・社会保障の現状・課題について理解が深まったと思う。
質問2	財政・社会保障の問題が自分達に関係があると思った。
質問3	プレゼンテーション能力や質問能力が向上したと思う。
質問4	今回の発表を通じて、いろいろな経験をすることができた。
質問5	他のゼミの発表を見ることは参考になった。
質問6	今回の発表を通じた活動で、ゼミ活動や就職活動、グループワーク面接で参考となることがあったと思う。
質問7	質問を考えることで、批判的に考えることへの意識付けにつながった。
質問8	租税・財政・社会保障制度の問題の解決策を考えるためには、更に調べなければならないと感じた。
質問9	次回はもっと上手く発表できると思う。
質問10	また、合同ゼミ発表会に参加してみたいと思う。

表3：前期発表会におけるアンケート調査項目（見学ゼミ）

質問1	財政・社会保障の現状・課題について理解が深まったと思う。
質問2	財政・社会保障の問題が自分達に関係があると思った。
質問3	他のゼミの発表を見ることは参考になった。
質問4	質問を考えることで、批判的に考えることへの意識付けにつながった。
質問5	租税・財政・社会保障制度の問題の解決策を考えるためには、更に調べなければならないと感じた。
質問6	合同ゼミ発表会に参加してみたいと思った。

価とし、「そう思う」を5、「どちらかといえばそう思う」を4、「どちらともいえない」を3、「どちらかというと思わない」を2、「そう思わない」を1として記入してもらった。

さらに、6月13日（木）の発表会には、財務省より外部講師を招き、全体に対する総評が行われた<sup>11</sup>。

## 2.2 後期における合同ゼミ発表会

前期発表会が終わった後に、前期発表会に関わった教員が集まって「振り返りの会」が

行われ（6月26日（水））、後期における合同ゼミ発表会（以下、「後期発表会」と呼ぶ）のあり方について話し合われた。前期発表会での経験や反省等を踏まえ、以下の点での変更を加えた形で後期発表会を実施することになった。

第1は、より広域的なゼミからの参加を推奨することを理由に、テーマを限定せずに募集したことである。前期発表会では、「税制・財政上の課題と対応策」をキーワードとしたものであったことから、参加できるゼミは限定的であった。この点を踏まえ、テーマを限定しないで発表希望を募ることで、より多くのゼミの参加を促した。

第2は、クリッカーによる投票採点の廃止

<sup>11</sup> ただし、当該講師の航空便の時間の関係から、8本目の発表が終わった段階での総評となった。

である。クリッカーによる採点は数値という分かりやすい形で示され、かつ全ての参加者が評価に加わることができるという利点を持つ反面、振り返りの会において、その得点にどのような意味があるのかといった疑問や、また「プレゼンテーションの練習の場」として考えた場合、そこで得点による明確な優劣を明示することが望ましいことなのかといった意見が出された。その結果、後期に発表会では投票採点を実施しないこととなった。

第3は、司会ゼミおよび討論ゼミ（コメントーターゼミ）の設定である。前期ゼミ発表会では、ゼミ指導教員が司会を行い、発表会の運営に携わった。また質疑応答の時間が設定されてはいたものの、十分に活発な議論が行われたとは言い難い状況であった。後期における合同ゼミ発表会では、前期におけるこのような経験・反省を踏まえて、司会を報告ゼミで輪番させ、また討論ゼミをあらかじめ決めた上で質問事項を事前に考えさせておくことで、より学生参加型の活発な議論が期待できるスタイルとした。またこのような「学生主体型の発表会」を目指す観点から、外部講師による講評は行わないことにした。なお、発表日の10日ほど前までに、eラーニングシステムのWebClassの会議室（掲示版）に参加学生が発表資料を投稿し、討論ゼミが3日ほど前までに質問事項を投稿することにより、質問と回答を考える時間を確保することとした<sup>12</sup>。

そしてこれらの変更点を加えた上で、本稿

12 WebClassとは、日本データパシフィック株式会社によるeラーニングシステムであり、授業用の資料閲覧機能、レポート課題のファイル提出機能、テスト機能、会議室（掲示版）機能を有している。詳細については、以下の日本データパシフィック株式会社のホームページを参照。<http://www.datapacific.co.jp/webclass/index.html>

の著者（笹川）が、学部教員全員宛に後期発表会についてのアナウンスした上で、発表ゼミを募集した。その結果、以下の（表4）に掲げるような16本の発表がエントリーされた（8名の教員が担当するゼミがエントリー）。なお後期発表会においては、ゼミ単位での見学体制をとらなかったことから、ゼミ単位での参加はなく、参加および見学学生数は報告会合計でのべ122人であった。なお、1年生ゼミである教養ゼミナールおよび2年生ゼミである基礎ゼミについては、すでに半期で修了していることから、今回のエントリーは全て専門ゼミからのものであった（よって（表4）においては「ゼミの種類」は示していない）。また全部で16本の発表があったことから、4本の発表を1つの班とする4つの班（A班、B班、C班、D班）を構成した。なお、A班からD班へのグループ分けに際しては、同一ゼミが同じ班にならないように分散配置した。

なお発表会の実施時期は、11月2週目（11月4日（祝日）からの週）とし、前期発表会に参加した教員各1名が各班のコーディネーターとなり、日程等の調整を行った。この時期を開催時期として設定した理由としては、後期発表会への参加ゼミの少なくない数が、外部団体等が開催するゼミ大会での発表を考えており、その発表会の前段階として位置づけやすい時期と考えられたためである<sup>13</sup>。また、この時期が2年生におけるゼミ選択（3年生時における専門ゼミ選択）の時期であることから、本発表会をオープン開催（見学可

13 一例として、日本学生経済ゼミナール大会、九州商経ゼミナール大会、全国学生保険学ゼミナール大会などのブレ大会および本大会が11月中旬から12月初旬に開催となっていたことや、長崎大学経済学部が毎年行っている学生懸賞論文の締め切り日が11月12日（月）であったこと等があげられる。

表4：後期発表会における班・参加ゼミ・報告タイトル・人数一覧

班（発表会日時）	ゼミ名（専門領域名）	報告タイトル	人数
A班 11月8日（金）	財政学ゼミ	少子化を解消するには？	4人
	保険論ゼミ	国内における国民皆保険制度と今後の可能性	5人
	経営戦略論ゼミ	非連続的イノベーションと企業の生存：コンタクトレンズ産業の事例分析	3人
	経済政策ゼミ	リゾート法と地域社会（第3セクターの破綻問題に関連させて）	4人
B班 11月5日（火）	保険論ゼミ	日本の生活保護制度 ～セーフティネットとしてのあり方～	4人
	経営戦略論ゼミ	非連続的イノベーションと企業の生存：時計産業の事例分析	3人
	経営学ゼミ	ディズニーの魔法にかけられて ～アトラクションのトリック～	12人
	国際協力機構論ゼミ	日本におけるエネルギー供給戦略 ～石油の安定供給～	3人
C班 11月7日（木）	経済政策ゼミ	資金循環からみた金融緩和の効果	3人
	財政学ゼミ	長崎は自立できるのか？	4人
	国際協力機構論ゼミ	海外進出する企業が現地の人々の生活水準を向上させるには	4人
	経営戦略論ゼミ	非連続的イノベーションと企業の生存：即席めん産業の事例分析	3人
D班 11月7日（木）	経営戦略論ゼミ	非連続的イノベーションと企業の生存：自動車産業の事例分析	3人
	経済政策ゼミ	中小企業金融における金融機関の役割	4人
	租税法ゼミ	中国からASEANへ～中国経済の崩壊～	9人
	マクロ経済学ゼミ	TPPと長崎の農業の行方	2人

能である旨を日時、発表ゼミ、テーマとあわせて掲示した上で、参加ゼミに将来的に入ること希望している2年生のゼミ選びの判断材料の1つとしてもらえるようにしたことも、この時期を選択した理由の1つとして掲げられる。

なお1グループの発表時間は原則として35分とした<sup>14</sup>。このうち20分をプレゼンテーシ

ョン、10分を討論ゼミとの質疑応答、残り5分をフロアーからの質疑応答の時間に充当した。また各ゼミのプレゼンテーション終了後、次のプレゼンテーションに交代する時間を使って前期の発表会のときと同様の「評価シート」の記入をしてもらった。さらに、合同ゼ

表時間を希望し、別のゼミが長い発表時間を希望したことから、この両ゼミの発表時間については、原則である35分よりも短くあるいは長く設定された。

14 例外としてB班において、1つのゼミが短い発



表5：後期発表会におけるアンケート調査項目（参加ゼミ生）

質問1	経済・経営の現状・課題について理解が深まったと思う。
質問2	プレゼンテーション能力や質問能力が向上したと思う。
質問3	今回の発表を通じて、いろいろな経験をすることができた。
質問4	他のゼミの発表を見ることは参考になった。
質問5	今回の発表を通じた活動で、ゼミ活動や就職活動、グループワーク面接で参考となることがあったと思う。
質問6	コメンテーターを務めることで、批判的に考えることへの意識付けに繋がった。
質問7	次回はもっと上手く発表できると思う。
質問8	卒業論文でも同様な合同報告会があればよいと思った。
質問9	合同ゼミ発表会は今後も続けるべきだと思う。

表6：後期発表会におけるアンケート調査項目（見学者）

質問1	経済・経営の課題について理解が深まったと思う。
質問2	質問を考えることは、批判的に考えることの意識づけにつながった。
質問3	他（or 先輩）のゼミの発表を見ることは参考になった。
質問4	自分達も合同報告会に参加したいと思った。
質問5	専門ゼミの募集期間に合同ゼミ発表会を行うことは、ゼミの内容を知る上で有益だと思った。

ミ発表会のさらなる改善等を目的にアンケート調査を行った。なお参加ゼミと見学ゼミを区分してアンケートを実施した点については前期と同様であるが、前期とは異なりテーマを財政・租税・社会保障等に限定しなかったことから、質問項目の表現を一部変更した。さらに今回は、討論ゼミを設定したこと、ゼミ選択の情報収集を目的とした2年生の参加が想定されたことから、これらに関連する項目を追加した。なお、具体的な質問項目については、以下の（表5）および（表6）のとおりである。

### 3．合同ゼミ発表会の成果報告

本章では、前期および後期において実施した合同ゼミ発表会にかかる成果報告を行う。具体的には、2回の合同ゼミ発表会後に参加ゼミ生および見学した学生に記入してもらっ

たアンケートの集計結果に基づいた議論を行う。また、これらの数値データに自由記述してもらった内容を加味した検討を行う。具体的には、参加ゼミと見学ゼミとに区分した上で、それぞれの参加者にかかる評価の特徴について吟味していく。

#### 3.1 参加ゼミ生のアンケート結果

議論の前提となるアンケート集計結果について示せば、以下の（表7）および（表8）のとおりである<sup>15</sup>。

そして、これら参加ゼミのアンケート結果から得られる示唆について叙述すれば、以下のようなになる。

第1に、合同ゼミ発表会が他ゼミとの交流機会として機能したということである。この

<sup>15</sup> なおアンケート回収枚数は、前期発表会については94人参加で85枚回収、後期発表会については70人参加で55枚回収となっている。

表7：前期発表会におけるアンケート結果（参加ゼミ生）

質問番号	6月13日(木) (46人)	6月17日(月) (37人)	合計 (85人)
質問1	4.57	4.08	4.35
質問2	4.52	4.16	4.37
質問3	3.72	3.38	3.57
質問4	4.20	3.73	3.99
質問5	4.52	4.05	4.32
質問6	4.13	3.78	3.98
質問7	3.64	3.05	3.39
質問8	4.50	4.24	4.39
質問9	4.11	3.86	4.00
質問10	3.83	3.19	3.55

表8：後期発表会におけるアンケート結果（参加ゼミ生）

質問番号	A班(14人)	B班(20人)	C班(13人)	D班(8人)	合計(55人)
質問1	4.43	3.85	4.54	4.63	4.27
質問2	4.14	3.89	4.08	4.00	4.01
質問3	4.29	4.37	4.46	4.63	4.41
質問4	4.57	4.63	4.54	4.63	4.59
質問5	4.14	3.84	4.00	4.25	4.01
質問6	3.93	3.78	3.77	3.14	3.72
質問7	4.21	3.95	4.54	4.00	4.16
質問8	3.71	3.55	4.08	3.13	3.65
質問9	4.50	4.40	4.46	4.13	4.40

ことは、前期・後期ともに「他のゼミの発表を見ることは参考になった」(前期の(質問5)および後期の(質問4))の項目に高い評価が付された点より確認できる。また、このような他ゼミとの交流は「今回の発表を通じて、いろいろな経験をする事ができた」(前期の(質問4)および後期の(質問3))という質問における「いろいろな経験」の1つであるとも解釈可能であるが、当該質問項目についても比較的高い評価が付されていることがわかる。なおこの質問項目にかかる6月17日(月)分のアンケート結果が低い点に

ついては(3.99点)、6月17日(月)に参加したのがゼミ大会等での今後の発表を予定していなかった基礎ゼミの学生であったことにあるのかもしれない。さらに自由記述において、「他のゼミ生に発表を聞いてもらうことで自分たちでは見つけられなかった欠点等を知ることができた」「合同ゼミは自分達以外のゼミの発表を聞くことができ、刺激になった」「他のグループの発表と自分たちの発表とを比較でき、学ぶことが多かった」などと述べられていたことも、合同ゼミ発表会がいわゆる「他流試合」の場として機能し認知さ



れていたことの証左であるといえる。

第2に、前期のように合同ゼミのテーマを限定的にすることが望ましいか、それとも後期のようにテーマを自由にすることが望ましいかについてである。このことは、前期・後期における(質問1)の得点差として理解可能である。そしてこの項目の評点については、合計値ベースでみた場合、前期が後期を上回る結果となっている。このことは、テーマを明確に設定して行った方が、他の発表をより深くしっかり理解できることを示唆しているように思われる。なおこの点は、後期発表会におけるB班の得点が他の班に比べてかなりの程度低かった(4つの班の中で唯一4点未満)ことに関連しているかもしれない。(表4)に示した各報告テーマより、後期に合同ゼミ発表会を実施した4つの班の中で、4本の発表内容の分散が一番大きかったのがB班であるとの推測を立てることができる。例えばB班に含まれている保険論ゼミは筆者の1人(大倉)がゼミ指導教員のゼミであるが、ファイナンス系列のゼミであり、主としてリスク・マネジメント、保険、社会保障をテーマに卒業論文の作成指導等を行うゼミである。それゆえ、保険論ゼミに所属する学生にとって、経営学や国際関係などは、相対的に「専門外のテーマ」である可能性が高く、このことが「理解の深化」を妨げたのかもしれない。さらに自由記述欄を見ると、「研究テーマがばらばらなので、いきなり本題に入られてもフロアーにはわからない」「内容が高度なものとなったため、理解が難しいと感じた人が多かったのでは」などの項目があり、各発表のテーマの不統一性が発表内容の理解を難しくした側面を有しているように思われる。ただし、このアンケートから得られた結果は、「テーマを明確化して合同ゼミ発表会を行うことが望ましい」という結論に必ずし

も直結するものではない点に注意する必要がある。実際、学生にとって理解が深まりやすいテーマが望ましいテーマであると断じることができず、逆にテーマが自由であることで普段接することのないテーマに接する機会が与えられたとの解釈も可能である。さらに、このような合同ゼミ発表会の運営という視点から考えた場合、テーマを限定しないことで多くのゼミからの参加を促し、ひいては合同ゼミの活性化に寄与するといった面も無視できない。

第3に、このような合同ゼミ発表会の機会が、参加ゼミ生のプレゼンテーション能力の向上に寄与したかどうかについてである。この点は、前期における(質問3)、後期における(質問2)の評点から検討することが可能である。そしてこの評点は前期よりも後期の方が高くなっている。後期になって当該質問項目の評点が向上した理由として、参加ゼミの全てが専門ゼミであったことで、より高度専門的な調査や分析を行ったり、より分かりやすいプレゼンテーションとなるような工夫を行ったりできたことを想起できる。この点は、自由記述欄における「なるべく分かりやすい言葉にすることに注意した」「短い時間の中で何を伝えたいか一番重要かをまとめた」「スライドをできるだけシンプルにした」などのコメントからもうかがい知ることができる。また後期発表会の実施は、前期末において確定していたことから、夏休みを含む十分な準備期間が存在したことも、前期以上のプレゼンテーション等の能力向上に寄与したかもしれない。

第4に、このような合同ゼミ発表会の機会が、今後のゼミ活動、就職活動、グループワーク面接等に結びついたと感じたかどうかについてである(前期における(質問6)および後期における(質問5))。この点については、

前期・後期ともにさほど差はなく、またその評点についても他の項目と比較してもさほど高いものではない。また自由記述欄を見ても、このような合同ゼミ発表会の機会が就職活動等に活かそうであるなどの言及は見られなかった。後期発表会については、3年生ゼミである専門ゼミが参加ゼミであり、かつ就職活動の解禁日である12月1日直前(11月上旬)における実施であったことを考えた場合、少し意外な結果であったと言える。あるいは、学生の中では、合同ゼミ発表会での経験と未経験の就職活動等がうまく結びつかないのかもしれない。他方、「会って話し合う回数をもっと増やすべきだった」などのような、今後のゼミ活動に結びつくと思われるような言及は散見された。

第5に、後期発表会において新たに導入した討論ゼミ制度の是非についてである。後期における(質問6)がこれに対応しており、いずれの班においても低い評点(いずれも4点未満)となっている。この点については、自由記述欄に「コメンテーターが何をするか良く分かっていなかった」というコメントが見られたことなどから勘案するに、討論ゼミのイメージを学生が把握しにくかったあるいは把握できなかったのかもしれない。実際に、学会等で散見される討論者制度による討論を見た経験のある学生はほぼ皆無であると思われることから、例えばゼミ指導教員から「討論ゼミなので質問を考えてくるように」と指導されたとしても、自分自身あるいは自分のゼミが討論ゼミとして発表ゼミと議論している姿をイメージするのは少なからず困難であった可能性がある。また別の自由記述として、「最初からコメンテーターを決めないで、急に質問した方が訓練になる」という意見もあった。このことは、討論ゼミからの質問があらかじめ発表ゼミに伝えられていたことが

ら、見方によってはこの討論ゼミ制度が「予定調和的な質疑応答」を招いたのかもしれない。あるいは、学生自身が「とっさに」「臨機応変に」質問に対応できる能力の醸成を求めていることの証左であったと言えるのかもしれない。

第6に、このような合同ゼミ発表会に再度参加したいかおよび今後も続けていくべきと考えるか否かという点についてである(前期の(質問10)および後期の(質問9))。まず同じ前期においても6月13日(木)と17日(月)とではかなり異なった結果が導出されていることが分かる。この点は、先にも述べたが、6月17日(月)に参加したのがゼミ大会等での今後の発表を予定していなかった基礎ゼミの学生であったことが大きく影響したのではないかと考えられる。それに対して後期においては、いずれの班においても高い評点を得ており、また後期のアンケート結果については、各班における評点の差異はさほど見られなかった。自由記述欄を見ても「良い経験になった」「このような機会があってよかった」「刺激を受けた」などの語尾で終わっている記述が少なからず見られ、各参加学生は、この合同ゼミ発表会を通じて、何か得たものがあり、それゆえにこのような機会に少なくない必要性を認識したものと思われる。しかしながら他方において、後期の(質問8)で問うた「卒業論文でも同様な合同報告会があればよいと思った」については、いずれの班も低い評点にとどまっている(3つの班が4点未満)。このことに直接言及した自由記述は見られなかったが、推測するに、卒業論文を提出した後に卒論発表会を実施することに対する過重負担感や、卒業論文での発表会が個人での発表となる(長崎大学経済学部における卒業論文は個人執筆のため)ことに対する拒否感(「個人で発表しなければ

ならない」ということに対する拒否感)のよ  
うなものがあるためではないかと思われる。

### 3.2 見学ゼミ生のアンケート結果

議論の前提となるアンケート集計結果につ  
いて示せば、以下の(表9)および(表10)  
のとおりである。

そして、これら見学者のアンケート結果が  
ら得られる示唆について叙述すれば、以下の  
ようになる。

第1に、見学者の視点から見た場合におい  
ても、合同ゼミ発表会が他ゼミとの交流機会  
として機能したということである。このこと  
は、アンケートにおける「他のゼミの発表を  
見ることは参考になった」の項目(前期およ  
び後期の(質問3))に、前期・後期ともに

高い評価が付された点から確認可能である。  
また、自由記述欄を見ると「それぞれのゼミ  
でどのようなことをしているのかを知ること  
ができた」「専門ゼミの希望を決めるにあた  
ってとても参考になった」などの記述が見ら  
れる。さらに、このことは、後期の(質問5)  
で問うた「専門ゼミの募集期間に合同ゼミ発  
表会を行うことは、ゼミの内容を知る上で有  
益だと思った」について高い評点が付されて  
いることから知る事ができる。しかしなが  
ら、他方において、「2年生はゼミ見学に  
来ても、ゼミの特色は分からないだろうと思  
う」といった各ゼミ紹介としての役割に否定的  
な記述もあったことから、この合同ゼミ発  
表会が各ゼミの紹介としての機会としての有  
効性については、さらなる検証が必要である

表9：前期発表会におけるアンケート結果(見学ゼミ)

質問番号	合計(52人)
質問1	4.11
質問2	4.09
質問3	4.57
質問4	3.57
質問5	4.37
質問6	3.17

表10：後期発表会におけるアンケート結果(見学者)<sup>16</sup>

質問番号	A班(7人)	B班(31人)	C班(8人)	D班(6人)	合計(52人)
質問1	4.00	4.45	4.00	4.50	4.33
質問2	4.14	3.94	3.88	4.60	4.03
質問3	4.71	4.68	4.38	4.83	4.66
質問4	2.71	4.10	4.13	4.50	3.96
質問5	4.29	4.71	4.50	4.83	4.64

16 見学ゼミアンケート集計数がB班に偏っている理  
由として、B班の発表日は2年生が経済学部キャン  
パスで講義を受ける火曜日であったためである(長  
崎大学経済学部のキャンパスは他学部とは別の場所

にある)。それに対して、残り3つの班が発表会を  
実施した木曜日および金曜日は、2年生が別キャン  
パスで講義を受ける曜日であり、それゆえに2年生  
の見学参加者数は少数にとどまった。

ように思われる。

第2に、見学者が質疑応答に参加できていたか否かという点である。この点については、前期の(質問4)および後期の(質問2)が関連していると思われるが、前期・後期いずれもこの質問項目に対する評点は高くない(4点未満)。その理由を自由記述欄に求めると「重要なところがわかりにくかった」「声の大きさが小さいように思われた」などのようなプレゼンテーションの分かりやすさに起因する項目と「レジュメを用意していないゼミがあった」「司会が質問者を当ててもよかったのでは」といった、見学者に対して質疑応答しやすい環境が十分用意できていなかった項目とに区分できる。

第3に、見学者が参加ゼミ生となって、この合同ゼミ発表会で報告したいと考えているかどうかについてである。この点については、前期の(質問6)および後期の(質問4)が関連していると思われるが、前期・後期いずれもこの質問項目に対する評点は高くない(4点未満)。前期については、テーマが財政・租税・社会保障に限定された中で行われていたこと、見学ゼミ生の多数が教養ゼミナールや基礎ゼミといった低次学年生であり、合同ゼミ発表会で報告することに対して少なからず躊躇があった可能性などが考えられる。それに対して後期については、合計ベースでは3.96と4点未満の評点となっているものの、A班を除く3つの班では4点以上となっており、A班における見学ゼミ生に固有の原因があったと考える方が自然である。なおA班における固有の理由として考えられる点として、このアンケートを記入した見学ゼミ生の多くが、別の外部のゼミ大会等で発表する予定または参加した経験を有しており、それゆえにあえて学内で合同ゼミ発表会の形で追加的に参加してみたいとは思わなかった点

を掲げることができる。よって、複数のゼミの学生が集まった発表の機会を有さない学生の視点に立脚した場合、このような合同ゼミ発表会への参加意欲は小さくないと解釈可能であるように思われる。

## 4. 結

本章では、アンケート結果より明らかとなった合同ゼミにおける今後の課題を述べることとする。

### 4.1 参加ゼミの拡大

後期発表会においては、同じゼミが同じ班に入らないように班編成を行ったため、B班のように専門分野が比較的離れている班も出現した。この点については、普段学習している分野と異なるテーマにかかる視野を広げる効果や、専門知識を有さない聴衆が相手であることを理由にプレゼンテーション能力の育成に適しているといった解釈も考えられることから、望ましいか否かについては即断できないように思われる。もちろん、参加ゼミが拡大すれば、比較的専門分野に近いゼミを同じ班にするといったことも可能となることを鑑みた場合、参加ゼミの拡大が活性化に少なからず寄与するものと思われる。また、単なる発表会ではなく、順位付け等を行うコンテスト形式にして学生に参加インセンティブを付与するといった方法も考えられるが、入賞を意識したテーマ設定になってしまって挑戦的なテーマが選択されない可能性も考えられるなど、そのメリット・デメリットについては一概に評価できないように思われる。

なお、後期発表会では、学生(2年生)のゼミ選択の参考とするため、学生個人単位での見学が行えるよう掲示を行ったが、前期発表会においては個人単位の見学を想定してい

なかった。よって今後の課題として、前期発表会においても、個人単位の見学を可能とすることで、合同発表会の認知度を高め、ひいては合同発表会への参加をゼミ選択の一要素として勘案できるようにしていくことで、参加への意識醸成を図っていくことが考えられる。

#### 4.2 見学者の拡大

後期発表会におけるB班は、実施された曜日の関係で見学者が他の班に比べて多かった。そして言うまでもなく、見学者数の増加は、このような合同ゼミ発表会の活性化に直結する。よって今後の課題としては、見学者が参加しやすい時間での開催を考える必要がある。ただし長崎大学経済学部の場合、実施される授業が複数のキャンパスに分かれていることから、全ての学年の学生にとって参加しやすい曜日が存在しないという現実的制約がある<sup>17</sup>。この制約に対する対応としては、例えば複数回開催することやターゲットとする学年等を明確に定めた上で、当該学年が参加しやすい曜日・時間帯等に設定するなどが考えられる。

#### 4.3 質疑応答の活性化

発表会の場においてとっさに回答できずにそのまま質疑応答の時間が終わってしまうことを回避するため、後期発表会においては、事前に質問事項を発表ゼミに伝える方法を採用した。これにより、回答ができずに質疑応

答が成立しない事態は起こらなかったものの、質疑応答が予定調和的になっている面もみられた。フロアからの活発な質問を期待していたが、「研究テーマがばらばらなので、いきなり本題に入られてもフロアにはわからない」との意見もあり、フロアからの質問が十分とは言えない状態のままで終わってしまった。このような予定調和を避けるための方策としては、討論ゼミからの質問を事前に通知するものと、通知しないものの2種類用意する、討論ゼミを2つ作り、一方のゼミについては質問を事前に通知し、もう一方のゼミについては質問を事前に通知しない、といったことが考えられる。またフロアからの質疑応答を活性化するためには、専門知識を有していない聴衆に対して、分かりやすく説明するための工夫が求められるが、このような分かりやすいプレゼンテーションを実現するためには、ゼミ学生等に対するさらなる指導等が必要であると考えられる。

#### 4.4 見学者の属性について

後期発表会における見学者のアンケートを分析した際、そのアンケートの回答者が2年生なのか、参加ゼミの4年生なのかなどが明らかでなかったことから（属性も含めた意味での無記名での記載としたため）、見学者の属性ごとの特性を抽出することができなかった。よって今後は、学年等の記入欄を設けることで、学年による評価の違い等についても明らかにしていく必要があるように思われる。

#### 謝 辞

合同発表会への参加及び運営に協力いただいた長崎大学経済学部の赤石孝次教授、工藤健准教授、高木かおる教授、谷口眞司教授、土橋力也准教授、林徹教授に深く感謝したい。なおあり得べき誤謬は全て筆者の責に帰するものである。

17 長崎大学経済学部生は、文教キャンパスと片淵キャンパスという2つのキャンパスで授業を受けているが、1年生については木曜日と金曜日に、2年生については月曜日から水曜日に経済学部がある片淵キャンパスで授業を受けることになっている。なお両キャンパス間の移動には、公共交通機関を利用した場合で40分程度を要する。

## 参 考 文 献

- 浅沼和典(1980)「国家論ゼミナール」『資料センター ニュース(明治大学政経資料センター)』17, p.9.
- 籠谷和弘(2013)「ソーシャルメディアを利用した学習の効果に関する検討 - 「オンライン合同ゼミ」参加者へのインタビュー調査から - 」『関東学院教養論集』23, pp.23-36.
- 増田敦・島崎百恵(2012)「アクティブラーニングを考える(1): 他大学との合同ゼミ研究会実践の成果と課題」『札幌大学総合論叢』34, pp.131-151.
- Okura, Mahito and Yanase, Noriyoshi (2013) "New Challenge to Broaden Undergraduate Education for RMI in Japan: Effective Use of Seminar Classes on a Nationwide Scale," Discussion Paper 2013-09, Faculty of Economics, Nagasaki University.
- 大崎滋生(1999)「なぜ、いま、この問いか? (ゼミナール研究発表 音楽学 と 音楽 の価値 - 1998年度音楽学合同ゼミナールの記録)」『桐朋学園大学研究紀要』25, pp.47-50.
- 佐賀健二(1993)「ISDN を利用した国際大学間の遠隔教育実験: その2」『電子情報通信学会技術研究報告・ET, 教育工学』93(360), pp.85-90.
- 笹川篤史(2013)「租税・財政学分野へのPBL活用について」『経営と経済』93(1・2), pp.91-119.